

「山」とはつまり何だったのか
～辻まことのウラヤマと社会的共通資本～
草苺 健 (19代)

●ベースに山があった

2013年度からの2年、苫小牧工業高専で環境系の非常勤講師を引き受けることとなり、初めてシラバス(講義実施要綱)なるものを作成した。講義といっても自然環境系の技術者だった私は、学びつつ経験して得ることができた知見と経験知をなんとか体系的につないで組み立ててみただけである。そこで発見したのは、研究者でもないただの勤め人でも、シラバスを作ってみることは歩いてきた来し方を総括する、個人的な履歴書みたいなものになることであり、しかもその時間が結構ゴージャスに感じられることだった。

ところで、シラバスを編むように作り上げる過程で、来し方を差配する鍵のような存在として突如「山」が浮かんできたのである。自分にとって山とはなんだったのか、山の日々は人生でどういう意味があったのか。

シラバスづくりでやっと初めてそれを俯瞰できたような気がした。実のところ山は私の職業スキルに密接不可分でもあったことを改めて知った。しかし山を含む来し方の軌跡は一見行き当たりばったりの、何ともまとまりのない紆余曲折のように見えた。

ただ、この歳になってよく考えてみると、自分の足取りというものにそれとなく運命づけられたものを感じざるを得ない。自然科学から社会科学へのひとつながりもシラバスで感じたと同様、意外に無理なく連続としていて、驚くことにそこにはやはり山々の経験が通奏低音のように響いているのである。実家の裏の地藏さんとクスノキは幼き日々の癒しの場だったが、そんな小さな裏山に始まり博物学の先生に連れて行ってもらった植物採集を兼ねた登山などが原体験になったのだろう。東北の里の博物的探索から高校時代は生物部を選ぶことになり、ワングルの山々、公私にわたる森づくりへと、紆余曲折に見えた足取りの背景には必然性というのか一本の道筋が浮かび上がっていた。

そしてその先にたどり着いたのが50代以降の里山願望だった。幼少の時から山登りの時代までの関心や足跡をポイントに落としてつないでみるだけで、その後の方向はもうあぶりだされていたことになる。山や樹木との縁が歳とともに深まったというべきか、それ

とも何事でも打ち込めばそちらに道ができるということか。人生はある意味シンプルだ。

●若き日の山々は多様なアプローチとゴールがある

10代後半から30代にかけての、まさに一途に打ち込んだ(つもりの)四季の山々の幅と奥行きはまさに格別である。とりわけ、時間を顧みずに登った学生時代の山々の経験は特に大きな意味を持っていたと今なら思える。その頃の山はもともと登ることが目的で、好みや目指すところは我らがワングルの各人にとってばらばらであり、高みをめざす目標などあるとも思えなかったが、遊びかと言われればそうでもなかった。いわば役にたつかどうか不明な教養みたいなもので、その一方、私個人はその後のキャリアの底辺を広げる類のものでもあったと総括できる。その立脚点は意外と小さくなく、ものを書くにも発言するにもある種の安心のもとになってきた。

つまり私は、ワングルのOB諸氏にも少なからずおられるように、山の自然の延長線上で仕事をしてきた一人である。例えば広大な森林管理の方針を提言していくような際に、山登りを通じてみてきた森林のバラエティの記憶が底辺のバランス感覚を下支えして役立ったりしている。眼前の対象を様々な植生の中に位置づけることができるのである。もちろんそれは本州や海外での風致体験とか森林との出会いによることもあるけれども、四季折々おびただしい頻度で訪れた北海道の山々の時間と観察に勝ることはない。一つ一つの現実を全体の中で位置づけられる広い座標を獲得してきたかの如くである。私にとっての山は第一に「事例の採集」だった。

ちなみに、この原稿を書くにあたって創部50周年記念誌の「道標」を開いてみると、各年代の方々がワングルとは何だったのか、自分はどんな山を目指してきたかなど、具体的に書かれていて内容は驚くほど多様、多彩である。わたしは『山の至福』と題して、つまるところはワングルの山行を通じて「自然とつながる」チャンスに巡り合えたこと、無自覚だった「つながり」がやがてギッフェルグリュック *gipfelglück* という言葉を得、これらの体験が「神とつながる」スピリチュアルな能動だと知ったことを、別の言い回しで述べてみた。これを単なる登頂の喜びを超えた「絶頂感」と理解し、事例の採集と並ぶ二つ目の大事な意味とな

った。山で知ったギッフェルグリュックとは、まるで深い冥想のあとのような静かで手応えのある魂の喜びであり幸福感であった。実はギッフェルグリュックのこういった意味合いは、冥想をするようになった50歳ころに初めて気が付いたことであり、事後評価として改めて行為と言葉の本当の含意を知った。

山や自然とつながるといふ一種の神秘体験は、天候や体力やその時の心持ち、そしておかれた環境や状況などさまざまな条件が絡み合って起きる稀有なものだから誰もが体験している訳ではない。もっと普通に起こりうることで間違いなく言えるのは、大学時代の山々はその後の「一人旅に向けた訓練」だったということだろう。これが山とはなんだったのかの問いの三つ目の答えである。そのおかげで自然の中に一人置かれても寝泊り、食事、ルート判断などサバイバルの独り立ちを助けることだけは確かだ。

山はいろいろなアプローチがあって、まるで登山口の多い連山みたいなものだ。大雪山という呼称があるけれどもそんなピークはないのと同じである。山は自然の象徴でありながら、あるときは魂を鎮める宗教であり、一人歩きのできるサバイバルの訓練であり、ナチュラルリスト志願者の道場であり、もちろん未知に挑戦するアルピニズムの世界であり、さすらう地方行脚・ワンダーフォーゲルの山岳版であり、時にハーモニーよろしく集い歌う場であり、焚火を囲むサロンであり、また時に散歩やスポーツであり、喜怒哀楽の場であり、シーハイルを叫ぶフィールドである。そのどれもが山に登る動機になる。

●そして山は思索と芸術のゆりかごだった



確かに山のクラブは体育会系にジャンル分けされているが、どうもあの無骨でデリカシーに欠けるような体育会系の組織の傘下にあるというのが不似合いな気がして実のところ落ち着かない。山は競争とはほぼ無

縁で、どこか文科系の部分も濃厚で六根清浄の世界にも近いとすら思っていたからなおさらだった。

北大は昭和の初めころに札幌近郊のスキーツアーの要所に山小屋を建設し、山を志向する人口はこの時期急増したはずだ。わたしが入っていた北大生の自治寮「青年寄宿舍」の当時の日誌を見ても、学生は無意根山などへ実にしばしば出かけ、赤岩に登る者もいた。冬の春香山で寄宿舍生が遭難死もした。当時の学生にとって山は日常であり、食べるために軽川(今の手稲)でウサギ狩りをしていた頃だ。ドイツでワンダーフォーゲル運動がおこった1890年代、日本は志賀重昂の『日本風景論』や小島卯水の『日本山水論』などやナショナリズムを鼓舞する文学が隆盛を極め、大島亮吉の『山〜紀行と随想』や伊藤秀五郎の『北の山』などが続き、山岳雑誌『アルプ』もよく読まれていた。そうなのである。山はこのような文学と親和性が抜群に強く、私の年代は多かれ少なかれ国内外の山岳文学に惹かれ読んだものである。

そこで想起されるのが辻まことである。一時、山岳雑誌『岳人』の表紙を描き、多くの画文集が出版されている。山に登りながら自然を「連続する風景」としてみてきた私は山々を淡彩スケッチの場とみなし、できれば「辻まこと」のようなアートや思索につながる山めぐり、山暮らしをしたいと思うようになっていた。

彼のファンは今でこそ少なくないが、当時の岳人をひきつけたそれは何だったのだろう。思えば彼はアルピニストの心と山野を楽しむワンダーの素顔を持っていた。しかし彼は決して高山を目指したわけではなく、スキーの名手であり、たまには数人の仲間たちと隠れ家のような、秘密基地のようなものを持ち、日頃はもっぱら単身で飄々と長逗留して詩人になり画家になり音楽家になっていた。そこで紡ぎだされる言葉の数々は、アフォリズムのように心あるものに染み渡った。その状況はさながら里山と奥山の間あたりの、野生と人の気配が入り混じるアズマシイ領域のように見えた。

辻まことはそれらの自然で得たモチーフを、実に薰り高いエッセーや画文に凝縮させた。社会風刺も卓抜で、一つの世界をカタチづくて見せ、彼が自らを評して見せた表現の一つが「ウラヤマニスト」であった。ウラヤマニストは困難な高みを目指すアルピニストの対極のひとつを気取って表現して見せた言葉だろうが、

今になっては彼の志向していたことは高み低みを越えた、山と自然との魂の対話ではなかったかと思われる。

辻まことと仲間とのエピソードはほとんど思い出せない、その理由は彼の基本が単独行であったことによるだろう。彼の場合は、いつもどこか孤高のにおいがあり、単独行の記述がもっぱらだ。人よりも動物や風との出会いの方が多いくらいだ。山を登りながら、陽がくれば焚火をたいて寝てしまうようなこともメルヘンのように描いている。山や自然の声を聴き、それから思索と芸術を紡ぎだしていくのに、独りは欠かせない環境だったことだろう。読み手は辻まことの感性がそこで森羅万象とわたり合う姿を言葉と絵で固唾をのんで追体験するのである。ウラヤマニストの語る文学、絵画、音楽に岳人がファンのようにとり囲んでいた様子を思い描くことができる。

●辻まことのひそみに倣うウラヤマニストへの道

あれだけ山に登っていたのが嘘のように、全く高みを目指すことはなくなって久しい。その代り胆振の地元民が言う「山」、即ち平地林が四季を通じた週末のフィールドに変わった。雑木林で山仕事をし、林を縫うように創ったフットパスを歩きながら季節を感じ、時に山小屋の夜の帳を焚火とともに過ごすのである。

腰を痛めかねない山仕事も林のガーデニングだと思えて苦にもならず、週末だけならむしろ勤め人生活の息抜きみたいなものだ。ウラヤマニストという言葉も忘れていた。ある時、辻まことが何かでそう言っていたなと気がつき、ちょっとしゃれいい言葉ではないかと、実は最近になってたまに使いはじめた。彼のエッセーなどに山仕事をしたような記述を読んだ覚えはないが、きつい山仕事こそ、ちょっとした登山のようなスリルがあり（本来あってはいけないのだが）体も使うから、まあ、斜面が平地に変わっただけで山みたいなものだ。そういう見方もできなくはない。

改めて辻まことの代表作のひとつ『山の声』を開いてみるうち、ワグネル時代の自分が「行く末は（ウラヤマニストのように）林を身近にして暮らしたい」と切望していたことを思い出す。高みを目指す山登りではなく、ウラヤマの雑木林のようなところで、自然との穏やかな往来こそしたいのだと、現実逃避か仙人願望のようなことを言っていたのである。

辻まことによって描かれる世界も、里山と奥山の中

間領域に存在するユートピアのようであり、生き物、風、雨などの風土と、結構無骨な若干の山人が登場するくらいで、基本は低い山と森の自然である。大学を終えてから30年近く経ったころには、私のそばにもそんな世界がほぼ実現していた。



ところで、山を志した人たちは大なり小なり山からなにがしかの恩恵か、少なくとも影響を受けている。一般論からいっても山は自然の代表であり、森羅万象の象徴であるから、しょせん無縁なわけがない。

時代は今、自然との共生を謳い、とりわけ日本人の遺伝子の中には無益な殺生を避け、里山のように生き物と折り合いをつけつつ、時には命もいただき食いつつだが、ともに生きる知恵と慣習が根付いている。

生物多様性社会という持って回った物言いも、我々にとって全く違和感がないのが本音であり、これは欧米人とかなり異なる側面であろう。その根っこを掘り下げてみると、個人的には仏教の根元と通じるヨガという言葉に突き当たる。ヨガとは本当の自分と、一喜一憂するいつもの自分、つまり「こころ」がつながるという意味とともに、本当の自分が森羅万象（宇宙ともいう）と結ばれるというふたつの意味を持つという。

ヨガの深い冥想の後の充足と、山で体験したギップエルグリュックの自然と一体となる絶頂感とは、実はそっくりなのだ。その一体感とは、山スキーで深雪に飛び出し雪煙を上げて滑る一瞬一瞬（サーフィンで大波をくぐるときも類似するという）、あるいは田園の真ただ中で突然向こう側からやってくる黙示である。ウラヤマの穏やかなひとりの時間は、ヨガ的な時の連続であり、一人きりの山仕事は行動的冥想である。

人は本来的に都市を離れ田園に戻りたい生き物だというのがあれば、背景にある一番の理由は不夜城のような都市のビルや喧噪には、神々と結ばれるヨガの契機がきわめて乏しく、その幸せが森羅万象と隣り合わせの田園にこそ存在するからではないだろうか。

で、目下週末だけのウラヤマニストと呼べるような境遇にあり、静的な「山」の時間が身近にある。小屋を維持するにはおびただしい細々とした仕事が残っている。それをウラヤマニストとしてこなすわけだが、雑多な仕事をしながらそれはとりもなおさずローテクな「手仕事」だと気づく。時には心を病んだ若者なども来て一緒にこの「手仕事」を手伝ってもらうこともあって、そうか、ウラヤマに残された取るに足らない「手仕事」は、頭でっかちの、情報の洪水のような日常からしばし避難できる止まり木のようなものか、と合点した。これが行動的冥想と呼びたい所以なのだ。

林は逃避するアジール、不可侵な隠れ家の役をする。つまり林には「山」と同じように「安らぎ」がある。夏草の生い茂る原野に神々の遊ぶ庭はあるし、草むらの陰や小屋の軒下の薄暗がりにも神は宿る。

それにもともとウラヤマニストは社交界からは遠く、どちらかと言えば内向きかもしれない。

一時夢中になったカヌーやフライフィッシングからも少しずつ離れて、身近な自然の手仕事に遊ぶようになったが、いわば古い支度をしているようなものだ。店じまいをするようで寂しいとみる向きもあるうけれど、どうせいずれ土に帰り、風になるのだ。

ところで、森羅万象は社会的な共通資本であり、誰のものでもないという側面があり、私のものだという「時間」ならだれでも持てる。山登りは三つの社会的共通資本、つまり道路インフラなどの社会資本、教育などの制度資本、そしてもう一つ森海川の自然資本のうち、国有地、公有地を主とした自然資本のなかで行われる。一方ウラヤマニストというのは、奥山であるそれらのずっと手前の里の民有地に、個人所有という枠組みをいったん解除してコモンズという枠組みをかけ直してユートピアを築こうとする人のことをさすのではないか。

アナーキスト辻潤の息子である辻まことの出自のせいだろうか、ややアナーキーな話になってきたけれども、強固な個人所有から「森や林はみんなのもの」という合意に一步近づけば、人々の幸せはもう少し近くなると思うのである。ワンデラーはその点では少し遠くにある非日常の真正カムイミントラを選び遊んでいることになるだろう。やはりホンモノはそちらであることはもちろんのことで、やがてそれが憧れに変わっていくときがあるというだけである。